

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 () 平成20年度:14-15.

成長発達を踏まえたアセスメント能力向上への試み

谷口, 亜紀子 ; 福岡, 美希 ; 近澤, 直美 ; 澤田, みどり

成長発達を踏まえたアセスメント能力向上への試み

4階西ナーステーション ○谷口亜紀子、福岡 美希、近澤 直美、澤田みどり

【はじめに】

Aセンターでは、様々な発達段階の患児を対象としており、成長発達に応じた看護介入が必要である。しかし、実際には小児で重要な成長発達のアセスメントが不足したまま、パターン化された看護診断や介入を用いる傾向にある。この傾向は、成長発達に関する知識が十分ではない為に、情報を吟味し効果的なアセスメントに至らない事が原因の一つではないかと考えた。安田¹⁾は、「小児看護アセスメントでは、子どもと家族を深く理解することが肝要である。・・・(中略)そして、成長・発達の視点から、プロセスでとらえ何をすべきかを判断していくことが重要である。」と述べている。そこで、成長発達の学習後に事例を用いて、情報の整理から看護診断抽出までの思考のプロセスをアセスメント中心に行った。その結果、看護師のアセスメント能力に若干の成果が得られたので報告する。

【用語の定義】

1. アセスメント：情報収集したデータを解釈、判断し推論する事
2. 成長発達：形態的・生理的側面、心理・社会的側面の事

【仮説】

事例検討に成長発達の学習を導入する事で看護師のアセスメント能力が向上する

【研究方法】

1. 仮説検証型
2. 対象
卒後1年目を除く事例検討会に参加した看護師18名
3. 調査期間
2007年8月～12月
4. 事例検討会
エリクソン・ピアジェなどの成長発達理論の資料を配布し、NANDA看護診断分類法2を用い関連図と全体像の記載を事前課題とした。事例検討会は2回行い、提出された資料を基に成長発達の概念統一、幼児期・学童期の特徴と理論学習、7領域の関連図と全体像の意見交換

を行った。

5. 評価分析方法

初回入院患者アセスメントデータベース(各45名)の7領域の情報記載率と全体像記載率を事例検討会前後で比較。

6. 倫理的配慮

研究目的・方法の説明を行い、プライバシーの保護、調査への協力の有無が個人に影響を及ぼさない事を説明し同意を得た。また、電子カルテからデータを抽出する際は、施設管理者の許可を得て、個人名が特定されないように配慮し研究終了後にはデータを破棄した。

【結果】

1. 事例検討会前後の情報記載率の比較

アニタ²⁾の小児期のアセスメント強調点「病気と入院に対する小児の反応」「親と子の相互関係」「家族に対するストレス因子」「成長と発達の障害」を参考に7領域の選択を行った。

領域1は健康自覚や健康管理行動の領域を示し、事例検討会前は15.6%で事例検討会後は42.2%と上昇。領域4はセルフケアや運動の領域を示し、前は97.8%で後は95.6%、領域5は認知や言語、感覚器の領域を示し、前は93.3%で後は91.1%と低下。領域6は自己概念や自己尊重の領域を示し、前は22.2%で後は33.3%と上昇。領域7は親子関係や社会性の領域を示し、前は82.2%で後は91.1%と上昇。領域9はコーピング反応やストレスの領域を示し、71.1%と前後で変化なし。領域13は成長発達の障害の領域を示し、前は71.1%で後は73.3%と上昇していた。

2. 事例検討会前後の全体像記載率の比較

疾患・治療経過中心の全体像記載は、前は75.5%であったものが、後は48.9%に減少。成長発達の情報に基づいた全体像記載は、前は15.6%で後は42.2%に上昇した。

【考察】

黒田³⁾は、全体像を捉えていないと「アセスメントの視点が患者を全体論的に知るのではなく、いきなり患者にどのような看護ケアをすればよいかになっている。」と

全体像を捉えた上での健康問題の重要性を強調している。事例検討会前は同様の状況で、疾患・治療経過中心の全体像記載になっていた。しかし、事例検討会后、疾患・治療経過中心の全体像記載が減少し、成長発達の情報を基にした全体像記載が約3割上昇した。また、観察から情報収集可能な領域4・5は記載率が高く、知識が必要な領域1・6・7・13は事例検討会后に記載率が上昇していた。これは、事例検討会で成長発達を学習した事で、アセスメントに必要な情報を意図的に収集し情報の内容理解を深め、さらに成長発達の視点から患児を捉えた全体像記載に繋がったと考える。また、実際の事例について、情報収集からアセスメントを自ら行い、事前に成長発達の学習を行なった経験が、看護師の思考過程の変化に繋がったと推察する。上鶴³⁾は、「抽象的な知識にとどめるだけでなく、実際の症例で看護診断にむすびつく患者さんの「反応」や背景の状況を確認することで概念達成となり、より理解が深まる。」と述べている。今回、成長発達の学習を導入した事例検討においても同様の結果が得られた。そして、事例を用いた学習は対象理解を深めアセスメント能力を高めたと考えられる。

【まとめ】

1. 成長発達の理論学習は、意図的な情報収集を促し、情報の内容理解に繋がる。
2. 事例を用いた学習は、思考過程の変化・トレーニングに繋がり、アセスメント能力を高める。
3. 以上の事から、「事例検討会に成長発達の学習を導入する事で看護師のアセスメント能力が向上する」という仮説は検証された。

【引用文献】

1. 安田恵美子：アセスメント力を磨く、こどもケア、第1巻第6号、p24, 2006
2. アニタP.シャーラー：看護診断データベース、医学書院、p265, 1992
3. 黒田裕子：看護における看護診断の位置づけ、看護教育、35/9、p661, 1994
4. 上鶴重美：基本から見直す看護診断、医学芸術社、p167, 2005